

# 平和をもたらす者たち — 神の子ら

## 第七至福〔マタイ福音書5,9〕の宗教史的解釈\*

ハンス・ヴィンディッシュ

須藤 伊知郎 (訳)

なぜまさに εἰρηνοποιοί「平和をもたらす者たち」\*\*に、その人たちは神の子らと呼ばれるという約束が与えられるのだろうか？ εἰρηνοποιοί の行いおよび心情と神の子の名および名誉ある地位との間に、特別な関係が成り立っているのだろうか？ 第六至福〔マタ5,8〕\*\*\*において心の清いことと神を見ることの間すでに明らかとなっているような、密接な関係があるのだろうか？ 注解者たちはこの問いに明解で満足できるような答えを減多に与えてくれない。いや、時折この問いはそもそも本気で立てられずらしい。

\*〔訳注〕以下は H. Windisch, *Friedensbringer — Gottessöhne. Eine religionsgeschichtliche Interpretation der 7. Seligpreisung*, ZNW 24 (1925) 240–260 の全訳である。原著のページの境目は〔240/241〕のように示してある。なお、原著の脚注番号はページ毎に振られている。副題に「宗教史的解釈」とあるが、「元来王的な特権の『民主化』」（第Ⅲ段落末尾）や、「支配者たちだけに…認められた、『神の子』という称号」の「大衆化」（第Ⅴ段落）という視点は、社会史的研究の嚆矢と言うこともできるであろう。また、「油注がれた者たち、キリストたち」（第Ⅴ段落）という捉え方は、G. タイセンの「集団メシア主義」という把握を先取りしているとも言える。Theissen, G., *Gruppenmessianismus. Überlegungen zum Ursprung der Kirche im Jüngerkreis Jesu*, in: ders., *Jesus als historische Gestalt*, FRLANT 202, Göttingen 2003, 255–281 参照。

\*\*〔訳注〕 εἰρηνοποιοί/εἰρηνοποιεῖν はギリシア語の動詞 ποιεῖν「作る／行う」の意味の広がりに応じて様々なニュアンスを持ちうる。ヴィンディッシュは文脈に沿って、前者を „Friedensbringer, -stifter, -träger, -begründer“ 「平和をもたらす者、～を打ち立てる者、～を担う者、～の基礎を築く者」、後者を „Frieden bringen, ... stiften, ... tragen, ... begründen, ... schaffen, ... machen, ... geben, um den Frieden bemühen, den Frieden durchführen, an der Verwirklichung des Friedens mitarbeiten, den Frieden fördern“ 「平和をもたらす、～を打ち立てる、～を担う、～の基礎を築く、～を創る、～を作る、～を与える、～のために労す、～を遂行する、～の実現のために共に働く、～を促進する」等と様々に訳している。以下、ギリシア語の εἰρηνοποιοί (単数形 εἰρηνοποιός) /εἰρηνοποιεῖν は頻出するため、いちいち訳さない。

\*\*\*〔訳注〕 Seligpreisung/-gen はこの箇所のように番号が付いている場合は「第六至福」のように訳し、付いていない場合は「至福の言葉」と訳す。

最も自然なのは断言として以下の考えである。すなわち、*εἰρηνοποιεῖν*「平和をもたらすこと」\*はイエスが敬虔な者たちに期待している神に似ていることの帰結である（マタ 5,45参照）。「自分のまわりに平和を広げる人は、神の姿と神の像の中にとどまりつづける」（シュラッター『講解』1,39)<sup>1</sup>。そうだとすれば、平和を創ることが神の本質的な特徴として認められていたことが示されなければならない。B. ヴァイス（『マタイ福音書』〔Weiss, B., *Das Evangelium des Matthäus*, KEK I/1, Göttingen<sup>9</sup>1898〕、94-95ページ）はこれに反論している。すなわち、神をまさに平和を打ち立てる者〔240/241〕と考える根拠はないのだ、という。彼はそこで、ここで言われている神の子であることを（神に似ていることではなく）神に愛されていることと捉える。その人たちが神の子のように（マタ 4,36）、神の愛の最高の対象となったことは、完成された神との交わりにおいて立ち現れ、そうして完全に認められることとなるであろう。しかしながらこの説明においても、敬虔な者たちはまさにその平和のための労苦によって神の愛にふさわしいものとされること、その人たちはそれによって特別に神の好意を獲得すること、が前提されているはずである。

この約束に将来の *υἱοὶ θεοῦ*「神の子ら」\*、天使たちあるいはメシアの世の仲間たち（ルカ 20,36）の地位への格上げへの言及を見るならば、*εἰρηνοποιεῖν*と天使が存在し共に生きていることとの間に内的な関連があると想定しなければならない。そこで J. ヴァイス（*Schriften des NT<sup>3</sup> I*〔『新約の諸文書』第3版 I 巻 Weiss, J., *Das Matthäus-Evangelium*, SNT 1, Göttingen<sup>3</sup>1917〕 255f.）は、「この『平和の子ら』（ルカ 10,6）以上に誰が、いと高き者の玉座を囲んでいる神の天使の集まりにふさわしいだろうか」と問うている<sup>2</sup>。しかしながら、もし

---

1 Schlatter, A., *Erläuterungen zum Neuen Testament. 1 Das Evangelium nach Matthäus ausgelegt für Bibelleser*, 5., durchges. Aufl., Stuttgart 1922, 39; 『新約聖書講解 1 マタイによる福音書』連見和男訳、新教出版社、1976年、56ページ。] E. クロースターマン（リーツマンの *Handbuch 注解叢書*）〔Klostermann, E., *Das Matthäusevangelium*, 2.Bde HNT, Tübingen 1909; ders., *Die Synoptiker*, HNT 2/1, Tübingen 1919〕 該当箇所をも参照。

\* 【訳注】 *υἱοὶ θεοῦ*「神の子ら」（単数形 *υἱὸς θεοῦ*「神の子」）も以下で頻出するため、いちいち訳さない。

2 似ているのが、部分的には逐語的に依存して、P. ダウシュ『三つの最古の福音書』〔Dausch, P., *Die drei älteren Evangelien*, HSNT I, 1918〕 112。類例として以下の至福の言葉を参照、*μακάριοι οἱ φόβον ἔχοντες θεοῦ, ὅτι αὐτοὶ ἄγγελοι θεοῦ γενήσονται*「幸せだ、神に対する恐れを持っている者たちは、なぜならその人たちがこそ神の使いたちとなるであろうから」（『パウロとテクラ行伝』 5 a. E.）。

我々がこの説明を受け入れなければならないとするならば、まさに天使たちが平和の子らと看做されている厳密な典拠があれば、歓迎すべきところである〔が、はたしてそのような典拠があるだろうか〕。

この概観は次のことを示している。すなわち、我々には、第七至福における〔εἰρηνοποιοί という〕称号と〔「神の子らと呼ばれるだろう」という〕約束の間の関係をより詳しく研究すべきあらゆる動機がある。四つの可能性が探求されるべきである。もちろん、それらを鋭く互いに切り離すことはできないのだが。「神の子ら」という名は εἰρηνοποιοί に第一に、神が極め付きの εἰρηνοποιός であるゆえに、帰されている可能性がある。第二に、天使たちあるいは神の子らが εἰρηνοποιοί であるゆえに。第三に、υἱὸς θεοῦ は名誉称号であるゆえに<sup>3</sup>。それは大小の人々の集団における平和と秩序の招来と保持に関わる特別な機能と功績に贈られる。第四に探求されなければならないのは、ひょっとすると双方の要素、εἰρηνοποιεῖν も神の子であることも、特に終末論的・メシア的な救いに関連づけられることができるのではないかと、ということである。

## I

これらの関係をより詳細に研究する前に、まず至福の言葉の構造をより厳密に規定することが重要である。我々は周〔241/242〕知のようにマタイの至福の言葉において二つの至福の様式を区別すべきである。1) 宗教的に規定された必要ないし不足が満たされることが約束されているもの、と2) 報酬を約束する至福の言葉、とである<sup>4</sup>。一方のグループでは救済のモチーフが、他方では報酬のモチーフが中心に立っている。双方のグループは、救いを獲得するのに特定の条件と前提が必要であるとする点で、共通している。我々の(第七)至福は第五至福 (οἱ ἐλεήμονες ἐλεηθήσονται 「憐れみ深い人々は…憐れみを受け

3 υἱὸς θεοῦ が名誉称号と感じられたことは、1 ヨハ 3,1; ヨハ 1,12-13 から明らかとなる。

4 J. ヴァイス『神の国についてのイエスの説教』第2版〔Weiß, J., Jesu Predigt vom Reiche Gottes<sup>2</sup>, 1900〕186-187 ページ、SNT<sup>3</sup> 1252ff [『新約の諸文書〔注解〕』第3版 I 巻、1917 年] 252 ページ以下参照。

るだろう』)と並んで、報酬の約束の最も明確な例である。εἰρηνοποιοίはその実践を重ねた εἰρηνοποιεῖν のゆえに、υἱὸς θεοῦ という称号を報酬として得てであろう。マタイ25章によれば、人の子の兄弟〔姉妹〕たちにあらゆる愛を示した者たちが、その主人の喜び〔の宴〕に入ることが許されることによって報酬を得たように、地上で平和を打ち立てた者たちは神の子らの輪に加えられることによって報酬を得る。

この至福の言葉はつまり、誰が神の子らに数えられるだろうか、という問いに答えを与えようとするものである。それはこの観点で全くユダヤ教の思想世界に接続している。最も良い具体例はラビ・イエフダ・ベン・シャローム (370年頃) の発言である<sup>5</sup>。

「神はイスラエルに語られた、『いつあなた方は私の子らと呼ばれるのか？ あなた方が私の言葉を受け入れる時に』 箴2,1参照。

これは何に喩えられるか？

一人の王に〔喩えられる〕。彼にその息子は言った、『この地において私があるあなたの子であることが分かる印を付けてください。』彼の父は彼に言った、『お前はすべての者が、お前は私の子であることを知るのが望みか？ 私の紫の外套をまとして私の冠をお前の頭に載せよ、そうすればすべての者が、お前は私の子であると知るであろう。』

ちょうどそのように神はイスラエル人たちに語られた、

『あなた方は、自分たちが私の子らであることが分かる印を付けてほしいのか？ トーラーと掟を満たすことに取り組み、そうすればすべての者が、あなた方は私の子らであることを見るであろう。』

あるいは、『いつあなた方は私の子らであるのか？ あなた方が私の言葉を受け入れる時に』 箴2,1参照。』

第七至福もまた、神の子らであることが分かる印を付けてほしいという敬虔な者たちの望みを前提としている。ラビの発言が、神の言葉を〔242/243〕受

---

5 申命記ラバ7 (204<sup>c</sup>)、シュトラック-ビラーベック『新約聖書注解』第I巻220ページ以下。〔訳注：ヴァインディッシュはこのラビの名前を誤って R. Juda ben Scholem と記しているが、正しくは R. J'huda ben Schalom である。〕

け入れること、トーラーを研究して掟を満たすことという、どちらかと言えばより一般的な条件を提示しているのに対して、この至福の言葉は、その人たちが εἰρηνοποιοί にならねばならないと告げる。εἰρηνοποιεῖν もまた神の紫の外套ないし冠に似ている。それは神の飾りであり、子らが父と似ていることをはっきりと示す。逆にこのラビの発言から至福の言葉を形成することができる。

Μακάριοι οἱ δεξάμενοι τοὺς λόγους μου, ὅτι αὐτοὶ υἱοὶ θεοῦ κληθήσονται.

「幸せだ、私の言葉を受け入れる者たちは、なぜならその人たちこそ神の子らと呼ばれるだろう。」

よく似ているのがシュトラック-ビラーベック上掲箇所が続いているタルムードの言葉（パレスティナ・タルムード「キッドウーシーン」1,61<sup>c</sup>,36）である。「イスラエル人たちが神の意志を行うなら、彼らは子らと呼ばれる」——これは至福の言葉にするとこうなるところである——μακάριοι οἱ ποιοῦντες τὸ θέλημα τοῦ θεοῦ, ὅτι αὐτοὶ υἱοὶ θεοῦ κληθήσονται——あるいは申命記14,1へのバライタ（「キッドウーシーン」36<sup>a</sup>）、「あなた方が子らのあり方で歩めば、あなた方は子らと呼ばれる」——μακάριοι οἱ ἀναστρεφόμενοι ὡς υἱοὶ (θεοῦ), ὅτι υἱοὶ (θεοῦ) κληθήσονται<sup>6</sup>。

そして同じ思考の組み合わせがおそらくヨベル書（1,24-25カウチュ編 [E. リットマン訳、Kautzsch, E. (Hg.), Die Pseudepigraphen des Alten Testaments, Tübingen 1900, 31-119.40]）においても前提されている。「そしてその人々の魂は私と私の掟全体に従い、そしてその人々は私の掟を行うだろう。そして私はその人々の父となり、そしてその人々は私の子らとなるであろう。そしてその人々はすべて生ける神の子らと呼ばれるであろう。そしてすべての天使たちとすべての霊たちが知り、見分けるであろう。その人々は私の子らであり、そして私が信実と義においてその人々の父であることを、そして私がその人々を愛

6 一つの類比を含んでいるのがまたラブ（[Rab=Abba Arikha] 3世紀）の言葉である。「人を憐れむ者はたしかに我らの父アブラハムの子孫に属している（ベツァー32<sup>b</sup>；シュトラック-ビラーベック I 巻 204 ページ）。ここでは憐れみ深いことがアブラハムの子孫であることの印である。1ペト 3,6；ヨハ 8,39 参照。これは〔至福の言葉にすると〕μακάριοι οἱ ἐλεῶντες, ὅτι υἱοὶ Ἀβραάμ εἰσιν「幸せだ、憐れむ者たちは、なぜならその人たちはアブラハムの子らであるから」〔となるところである〕。

していることを」。ここに υιοι θ. κληθ. という約束の終末論的性格はその確証を見出す。加えて黙示録 (21,7) の最後の勝利者の言葉においてもその確証を見出すのであるが、それは至福の言葉としてはこうなるだろう μακάριοι οι νικῶντες, ὅτι υιοι θεου κληθήσονται. 「幸せだ、勝利する者たちは、なぜならその人たちは神の子らと呼ばれるだろう。」

これらの言葉によって我々の至福の言葉の特別な構造に光が当てられた訳だが、まさに平和を打ち立てることに特別な名誉と特別な報酬を約束するユダヤ教の言葉もいくつかある。「祭壇でさえ…平和と呼ばれるなら」(士 6,24) とラビ・ヒツヤ・バル・アッパ (200年頃) は有名な「平和の章」\*において教える、「平和を愛し、平和を追求し、平和 (の挨拶) で先んじ、平和 (の挨拶) で答え、イスラエル人らと天の父の間に平和を創る者はなおさら [243/244] である」<sup>7</sup>。ここでは平和を打ち立てる者たちに「平和」という名誉ある名前が付けられている。μακάριοι οι ειρηνοποιοί, ὅτι καλοῦνται, εἰρήνη<sup>8</sup>. 「幸せだ、平和を作る者たちは、なぜならその人たちは『平和』と呼ばれる。」

メヒルタ出20,25によれば、二人の争う人間、二つの都市、二つの国家、二つの政府、二つの家族の間に平和を打ち立てる者には<sup>8</sup>、彼の上に罰がくだらないことが、タンフマ・イェトロ90b においては、彼の寿命を長くすることが、約束される (シュトラック-ビラーベック I 巻215ページ)。ペア1,1によれば (両親を敬うこと、愛の業を行うこと、そして先行する全てに匹敵するトーラーの研究と並んで)、人々の間に平和を打ち立てること (הַבְּרָאָה שְׁלוֹם בֵּין אָדָם לְחֶבְרֵי) が、人がこの世においてその果実 (利息) を享受し、元本 (完全な報酬) は来るべき世においてその人を待っているという事柄の中に数え入れられている (このことについてマコ10,28以下参照)。タアニート22a によれば預言者エリヤは二人の道化について、その職業は不機嫌な人々を快活にし、争っている者たちの間に平和を創ることなのだが、こう言った、「この者たちもまた来る

\* [訳注] バビロニア・タルムード番外冊子「デレク・エレッツ・ズタ」末尾の付加。

7 フィービヒ『山上の説教』[Fiebig, P., Jesu Bergpredigt, 1924] 14 ページを見よ。

8 この詳論は共観福音書の ειρηνοποιοί の注釈の役目を果たすことができる。

べき世の子らである」<sup>9</sup>、すなわち、μακάριοι οἱ εἰρηνοποιοί, ὅτι υἱοὶ εἰσιν καὶ αὐτοὶ τοῦ μέλλοντος αἰῶνος。

最後にスラブ語エノク書(52,10以下)には、平和を好む者たちの二つの終末論的に動機付けられた至福の言葉がある。

「幸せだ、平和と愛を植え…る者は

幸せだ、すべての者たちに平和を好む舌と心で語りかけ…

なぜならすべてこのことは大いなる裁きの日に

〔魂の〕秤と〔命の〕書において明らかにされるから。〕

福音書においてもユダヤ教黙示文学においても、「平和を好む者の報酬」は至福の言葉にまとめられている。

我々の至福の言葉の二つの思考はこうしてユダヤ教文書においても実証された。すなわち、特定の行為が神の子であることの前提であること、そして平和を創ることが名誉ある名前を勝ち取り、来るべき世においてその報酬を見いだすこと、である。ただし、まさに平和を打ち立てる者が「神の子ら」の名誉称号で顕彰されるだろうというのは、タルムードに、私が見る限りでは、典拠がない。正しくもピラーベック(第I巻220ページ)は厳密な類例が欠けていることに注意を喚起している。[244/245] ラビの平和に関して褒め称える様々な発言があるのだから、そのような発言があっても〔大勢に影響はなく〕「関わりがない」というようなことには決してならないだろう<sup>10</sup>。

## II

それでは、平和を打ち立てることはユダヤ教の思想において神の行為における特別で特徴的な徴であるので、人間の平和を求める努力は無造作に、神を真

9 シュトラック・ピラーベック第I巻、218ページ。クレマー-ケーゲル『〔新約聖書ギリシア語聖書神学〕辞典』〔Cremer-Kögel, Biblisch-theologisches Wörterbuch der neutestamentlichen Gräzität, 10. Aufl. Gotha 1915〕417ページによれば、すでにトールック『キリストの山上の説教』〔Tholuck, Die Bergrede Christi, Gotha 1872〕がこのタルムードの箇所をここと比較している。

10 これは、J. KrengelのMGWJ 68 (1924) S.73におけるシュトラックの著作に対する、ちなみに非常に関わりがある、批判的な告発に反対して。

似ることあるいは神に似ていることの証明、と理解することができるのだろうか<sup>11</sup>？

事実旧約は、ヤハウェが平和を創るあるいは創ろうと欲する、そして平和は彼から来るという確言に満ちている。レビ記26,6とハガイ書2,9 (10) と並んで特に二つの典型的な叙述が重要である。すなわち、イザヤ書45,7における ὁ ποιῶν εἰρήνην (״שׁ ׀ִשָׁן) — ただし και κτίζων κακά と並んで — そしてヨブ記25,2の בְּמַרְוֵי ״שׁ ׀ִשָׁן 「いと高きところで平和を創る者」である<sup>12</sup>。すでにこれらの箇所を基盤として εἰρηνοποιεῖν は神の本質的特徴へと高められることができる。

積極的な典拠を提供しているのが特にユダヤ人の祈りの定式である。「平和を創る者」は、あらゆる祝福の言葉に挿入され、あるいは付け足される定式となっている。「平和の章」におけるラビ・ヨシュアの (ラビ・レビの名における) 発言を参照。「大いなるかな平和は。なぜならすべての祝福の言葉と祈りを人は『平和』云々で閉じるのである。祝福の言葉を人は『平和』で閉じる。平和を造るものは [祝福されてあれ、と]」<sup>13</sup>。イザヤ書45章に由来する定式がすでにイエスの時代にすべてのユダヤ人たちに流布していた可能性がある。同じ平和の讃歌においてラビ・ヨシュアは平和の偉大さを、聖者たちの名が平和と呼ばれることに由来させている。彼はそのために有利となる証拠として「ヤハウェは平和」士師記6,24という祭壇の碑文を挙げている<sup>14</sup>。そしてラビ・メイルによれば、神は義人たちに贈るために平和より美しいものを創らなかつた (民数記ラバ11；シュトラック-ビラーベック第Ⅱ巻223ページ)。[245/246]

---

11 「平和」の概念の内容と意味には私は詳しく立ち入りはしない (平和、福祉、救い、幸運、秩序)。W. カスパーリ 『旧約における「平和」の表象と言葉』 [Caspari, W., Vorstellung und Wort »Friede« im AT (BFChTh XIV 4) ] 1910; 同、項目「平和」クレーマー-ケーゲル 『新約聖書ギリシア語聖書神学辞典』 [Artikel εἰρήνη in: Cremer-Kögels Wörterb. d. nt. Grätz. 1915] S.414ff.参照。

12 七十人訳はここで ὁ ποιῶν τὴν σύμπασαν ἐν ὑψίστῳ と訳しており、つまり ׀ִשָׁן 「満ちている」のことを考えている。さらにエレ 33,9; ヨブ 27,5 を参照。

13 フィービヒ、15 ページ；シュトラック-ビラーベック第Ⅰ巻 215 ページ。

14 フィービヒ、14 ページ、上掲 [本稿 5 ページ最終行]；シュトラック-ビラーベック第Ⅰ巻 216 ページ。



このことに対応しているのが、人がヤハウェに平和を創ってくださるように願うことである。これに関して特徴的なのは、ラブ・サフラ（300年頃）が十八祈祷に加えた付加である<sup>15</sup>。「主なる我らの神よ、あなたが上なる家族の中に平和を与え（すなわち、天使の世界で、ヨブ25,2参照）<sup>16</sup>、下なる家族（イスラエル）の中に、そしてあなたのトーラーと取り組む弟子たちの間に平和を与えることが、あなたの意志でありますように…」。ここでも、神が天におけるように地上でも εἰρηνοποιός であるという確信が明言されている。それは、ラビ・バル・カッパラが、天使たちの間には敵対心…そして喧嘩や争い事はない、なぜなら聖なるお方〔神〕がその者たちに平和を与えたからである、と説明している平和に関する章においても表現されている<sup>17</sup>。最後にこの旧約的・ユダヤ的な発想が新約において根付いたところを指摘しておこう。それは特に θεὸς τῆς εἰρήνης「平和の神」の呼びかけ（1テサ5,23；ロマ15,33；16,20その他多数）、さらに神は平和の神である、という「教理」（1コリ14,33）である。

そうすると、神が全世界において偉大な平和を打ち立てる者であるという考えは、旧約以来ユダヤ教にとってありふれたものとなり、そうであり続けたのであり、その結果我々の至福の言葉は、神に似ていることという概念を潜り込ませれば、直ちに理解できたのであるが、上で第二に挙げられた、天上の神の子らもまた平和を打ち立てる者たちと呼ばれるという連想は、典拠を挙げて証明することができないと思われる。逆に、たった今挙げた複数の箇所によれば、天使たちないし少なくともその一部のグループは争乱〔Unfrieden〕に傾き、神がその平和の務めをその者たちに対しても果たさなければならない<sup>18</sup>。それに対立しているのがもちろん、十二族長の遺訓が「平和の天使」を知っているということである。平和の天使は神と人間たちの間の代弁者また仲介者と

15 ベラホト 16b；シュトラック-ビラーベック第I巻420ページ；フィービヒ 116ページ。

16 フィービヒ上掲箇所によれば諸民族の守護天使たちのことが考えられている。守護天使たちが平和を保てば、諸民族の〔国際〕平和も保障されるのである。

17 フィービヒ、13ページ。

18 平和の書からの以下の文をも参照。「大いなるかな平和は。なぜなら、見よ、上なる者たち（=天使たち）はそれを必要としている、ヨブ25,2」（シュトラック-ビラーベック第I巻216ページ）。

して敵の王国に対してイスラエルのために平和を確保し<sup>19</sup>、イスラエルを最大の苦難から守ってくれる者であり(ダン6,2-5)、他方で個々の敬虔な者たちを永遠の命に導き入れる者である(アセル6,6)。ここではつまり事実天使が εἰρηνοποιός という称号を獲得している。

ここでも平和の讃歌(民数記ラバ11,164b; [246/247] シュトラック-ビラーベック Ⅱ 卷223-224ページ)は一つの典拠を提供しており、義人がその死の際に下級天使の三つの群れによって平和と共に(あるいはその中に)受け容れられると叙述している。しかしながらユダヤ教に、天使を平和をもたらす者と看做すことがはたして流布していたかは疑わしい。我々はそのでなおさらに、平和を打ち立てる業と神の子らという名誉称号の間のより密接な関係について、探求しなければならない。

### Ⅲ

さて、すでにユダヤ教の学者 T. タールはその H. オールト教授を反駁する小論「タルムードと福音書への一瞥」〔Tal, T., *Een blik in Talmoud en Evangelie*, Amsterdam 1881〕で\*、福音書の倫理教説(意味されているのは、山上の説教)はタルムードに出てくるものに他ならないということを示そうとして、ソロモンに歴代誌上22,9-10(タールは歴下23,9-10と書いている)で与えられた約束を指摘し、そこから、明らかにタルムード記者たちはその詩的に一般化するやり方で、彼らがしばしば称賛している平和を褒め称えるために、この名誉ある名前ソロモンに「平和を打ち立てる者は神の子と呼ばれる」というハガダーを継ぎ足したのだ、という推論を導いた。そしてそのようなハガダーに我々の節も基づいているのだ、という(44ページ)。そのようなハガダーの典拠を残念

---

19 ギリシア語校訂版と偽典におけるチャールズの注を見よ。

\* [訳注] Henricus Oort (1836-1927) と Tobias Tal (1847-1898) の論争については、van der Heide, A./Jongeling, K., *Hebrew at Leiden University. Between Old Testament and Judaism*, in: Otterspeer, W. (Hg.), *Leiden Oriental Connections 1850-1940*, Leiden 1989, 27-42, bes. 37, Anm.40 を参照。オールトがタルムードの意義を過小評価したのに対して、タールはその意義を強調し、山上の説教の倫理的内容すべてにはタルムードの中に並行情があることを主張した。

ながら彼は提示していない。しかしながら私にも、引き合いに出された約束は、しかも特に歴代誌が持つてくる様式において、我々の至福の言葉に若干の光を投げかけるものであると思われる。問題となっているのは以下の箇所である。 9 ἰδοὺ υἱὸς τίκτεται σοι, οὗτος ἔσται ἀνὴρ ἀναπαύσεως, καὶ ἀναπαύσω αὐτὸν ἀπὸ πάντων τῶν ἐχθρῶν κυκλόθεν, ὅτι Σαλωμών ὄνομα αὐτοῦ, καὶ εἰρήνην καὶ ἡσυχίαν δώσω ἐπὶ Ἰσραὴλ ἐν ταῖς ἡμέραις αὐτοῦ. 10 οὗτος οἰκοδομήσει οἶκον τῷ ὀνόματί μου, καὶ οὗτος ἔσται μοι εἰς υἱὸν κἀγὼ αὐτῷ εἰς πατέρα, καὶ ἀνορθώσω θρόνον βασιλείας αὐτοῦ ἐν Ἰσραὴλ ἕως αἰῶνος. (さらに歴上28,6-7参照)。さて、ここで初めて *ειρηνοποιός* と *υἱὸς θεοῦ* の間に関連が付けられたのだという解釈に対して、ソロモンではなくたった今引用された発言に対応して神が本来の *ειρηνοποιός* であること、平和を造ることと神の子であることが一つに繋がっていることは決して強調されていないこと、そしてタールによって上掲書45-46ページに挙げられているタルムードの箇所においても、平和と平和を打ち立てることを高く評価することはどこにもソロモンの名前あるいはソロモン王の人格と結び付けられてはいないこと — タルムードの平和を打ち立てる者そして平和の英雄はむしろアロンである<sup>20</sup> — を持ち出すことができるだろう。しかし、これらの懷疑は私〔247/248〕見ではなんら決定的な力を持たない。やはりいずれにせよ大いに強調して歴代誌上22章で「神の子」という名誉称号が、その名、「ソロモン」=平和の人を担っている王に授与されている。その治世下で戦は止み、平和と安寧の時代が始まることになっている。平和の時代は神の子の支配である。平和を担う者は神の子と呼ばれる。明らかに歴代誌の著者は「神の子」の名に、平和の時代を開く者に授与される特別な称号を見ている。最後に、もし歴代誌の厳格に神中心的な文体（私が彼のために安息を創る、私が平和と安寧を与える）をそこまで文字通りに取らなければ<sup>21</sup>、平和の王ソロモンを *ειρηνοποιός* とも呼ぶことができる。

20 シュトラック-ビラーベック第I巻 217 ページの素晴らしい諸証言、特にサンヘドリン 6b; アポート・デ・ラビ・ナタン 12 を見よ。

21 詩編 110 編においてもヤハウェが行為者であって、メシアはその敵どもが打ち負かされるのを何もしないで見ていただけである。ヤハウェが王たちから戦いと勝利を取り上げるとするのは歴代誌の傾向に対応している。ベンツィガー〔Benziger, I., Die Bücher der Chronik, KHC, Tübingen und Leipzig 1901〕S. IX を見よ。

そうだとすると事実我々の至福の言葉に横たわっている平和の担い手（あるいは平和を打ち立てる者）と神の子という概念の組み合わせは、歴代誌上22章に遡らせることができる。いずれにせよソロモンは第七至福において語られている約束に意味があり、正しいということの一つの旧約の典拠である。ὡς Σαλωμώνを本文に付け足すことができる。ソロモンはそうだとすれば、あらゆる敬虔な者たち、その者たちも平和のために労苦したのであるから、神の子らと呼ばれるべきであるが、その原型なのである<sup>22</sup>。

そうだとするとたしかに平和を打ち立てることというこの称号は、上で扱われた、神が平和を創るという宗教的思想と関連している。神の子らは平和を打ち立てる者たちと呼ばれる。なぜなら、その者たちはその行為においていと高き神に似ている、あるいは神を真似ているから、あるいはその者たちによって（あるいはその名において）神が平和を地上にもたらすところの道具であるからである。

さて、もっともこの類型論（ソロモン＝平和の担い手＝神の子）は特にメシアに関連づけられたということが予想される<sup>23</sup>。ソロモンもメシアの一つの類型と看做すことができる。歴代誌上22,9-10の箇所はメシア的な響きも持っている（特に10節）。またソロモンの詩篇17,23以下で「ダビデの子」について期待されていることはその箇所に関連づけることもできる。後者は、歴代誌上によればヤハウエ自身がソロモンのために行うであろうことと同じ〔248/249〕ことを成し遂げるのである。特に歴代誌上22,9-10が依拠している基本的な箇所、サム下7,14はメシアに与えられた神の子という称号の源泉の一つである。メシアはソロモンのように神の子であり、メシアはソロモンのように平和を打ち立てる者である。旧約の典拠はまずイザヤ書9,5-7で、そこにはもちろん「神の子」という称号は欠けている。詩編2編、そこでは厳かに神の子と宣言され

---

22 サム下7章ではソロモンの名への仄めかしはまったく欠けている。そこでは、元来ダビデの王族全体が意味されていたという解釈さえ可能である。はたして〔歴代誌はサムエル記と列王記を資料としているという〕通例の資料の判断がこの章において正しいのか、私は判断を留保する。

23 W. アイヒロート『古代イスラエルにおける永遠の平和の希望』〔Eichrodt, W., Die Hoffnung des ewigen Friedens im alten Israel, BFChTh 25, Gütersloh 1920〕3 参照。

た（終わりの時の）王に地上の諸民族の支配とそれらの鎮圧が約束される — 平和の概念は欠けているが、イスラエルの民にとってこの王はもちろん平和をもたらす者でもある。明言してゼカリヤ書9,9-10のメシア的の王は戦いを根絶する者また平和をもたらす者として賛美されている。詩編2編とゼカリヤ書9章を結びつけるやいなや、ここでも「神の子」が世界の「平和を打ち立てるもの」であるという考えを持つことになる。この組み合わせに直接の典拠が旧約の中に、もちろんまだあるわけではない。平和をもたらす者として黙示文学もまた時折メシアを描いている。レビの遺訓18,4、さらにシリア語バルク黙示録73,1以下、シビュラの託宣Ⅲ652以下、最後に第四エズラ記 13,32以下（幻Ⅵ8-9）を見よ。そこではメシア的な戦士かつ平和の支配者がたしかに「神の子」という称号を付けられてはいないが、類似の名称「神の僕」を付けられている<sup>24</sup>。平和をもたらす者としてのメシアという表象がラビたちの間でも生きていたことを、大いなる「平和の章」に取り上げられているラビ・ヨセ（130年頃）の二つの発言（フィービヒ『山上の説教』〔Fiebig, P., Jesu Bergpredigt〕1924年、14ページ）が証明する。メシアの名前も平和と呼ばれ、そして王なるメシアがイスラエルに啓示されるところで、彼は他ならぬ平和で始める（典拠として最初の発言にはイザ9,5、他方にはイザ52,7が挙げられる）<sup>25</sup>。

正典においても正典後のユダヤ教文献においても、したがって明らかに、メシアは（ある種第二のソロモンとして）民と世界に平和をもたらす、という考えが語られている。「神の子」という称号はユダヤ教文書において王なるメシアに稀にしか明言して授与されていないので、「神の子—平和を打ち立てる者」という組み合わせは間接的にしか取り出すことができない。にもかかわらずそれが一番自然であることはたしかである。終わりの時の王が、あらゆる古代の王のように、神の子であり、その国ないし地に平和をもたらすであろうという

24 その箇所へのヴィオレットの翻訳〔Violet, B., Die Apoklypsen des Esra und des Baruch in deutscher Gestalt, Leipzig 1924〕を参照。

25 タルムードの王に関する発言、王がいるところ、そこに平和がある（ペシクタ・ラバティ 21, 103b、ダルマン『イエス—イエシュア—』〔Dalman, G., Jesus—Jeschua, Leipzig 1922〕213）を参照。

理念は、何れにせよユダヤ教の思考に対応する<sup>26</sup>。[249/250]

キリストと共に平和が来ること、そしてキリストが平和をもたらしたことは、やはり新約の思考でもある。それはまずキリストの誕生の際の天使の賛美、ルカ福音書2,14に見られる。メシアの時代は平和の時代であり、それをもたらすのは、今生まれたメシアである。さらにヨハネのキリストの言葉、ヨハネ福音書14,27 εἰρήνην τὴν ἐμὴν δίδωμι ὑμῖν (それには W. パウアー 『ヨハネ福音書』 [Bauer, W., Das Johannesevangelium, HNT 6, 2.Aufl. Göttingen 1925] 181-182ページ、該当箇所参照) — ここでは平和は弟子たちにも授与される内的なものである。特にキリストの救いの業の使徒 [パウロ] による叙述において、第一にはコロサイ書1,20 εἰρηνοποίησας διὰ τοῦ αἵματος τοῦ σταυροῦ αὐτοῦ — 平和は人々の神との平和である、ロマ書5,1参照、さらにエフェソ書2,14-15 ... ἵνα τοὺς δύο κτίσῃ ἐν αὐτῷ εἰς ἓνα καινὸν ἄνθρωπον ποιῶν εἰρήνην κτλ. — ここではキリストが打ち立てる平和は、ユダヤ人と異邦人を一つにして新しい人間の型にすることである。コロサイ書3,15をさらに参照。キリストが人類全体を平和の王国において一つにするという思考がここつまりなお明確に現れている。そこで我々にヨハネ文書とパウロ文書も神の子 — メシアそして εἰρηνοποιεῖν の概念の密接な結び付きを確証してくれる。ここでもなお、キリスト、極め付きの神の子が本来の εἰρηνοποιός であるということが保たれている<sup>27</sup>。

ソロモンについてのユダヤ教の伝承とメシアについてのユダヤ-キリスト教の伝統の中に、我々はそこで二つの (相互に近く触れ合っている) 思考の連関を見出した。そこから我々の至福の言葉の表象素材が導き出されている可能性がある。ひょっとするとその基盤として一つのメシアについての言葉があると主張できるかもしれない。すなわち、... καὶ υἱὸς θεοῦ κληθήσεται, ὅτι τὴν εἰρήνην

---

26 H. グレスマン『イスラエル-ユダヤの終末論の起源』[Grefmann, H., Der Ursprung der israel.-jüd. Eschatologie, Tübingen 1905] 250 以下参照。

27 共観伝承は逆のことを語る言葉を一つだけ知っている。マタイ福音書 10,34! ここにはメシアの機能について別の構想が横たわっている。というより、この言葉は終末論のより早い段階に関連している。歴代誌下 22 章とソロモンの詩篇 17 篇の成就も、救いの状態の実現に先立たねばならない戦いを前提している。黙示録 6,4、シュトラッカー-ビラーベック第 I 巻 585-586 ページをも参照。

ποιήσει ἐπὶ τῆς γῆς. 「そして彼は神の子と呼ばれるであろう、なぜなら彼は平和を地上に創るであろうから。」

さて、我々の至福の言葉は、もちろんメシアの口に置かれたものであるが、その〔平和を創るという〕活動と〔神の子という〕名誉称号の両方を、敬虔な者たち、弟子たち、信じる者たちに帰している — マタイ福音書5,16で弟子たちに、ヨハネ福音書8,12によれば本来キリストに相応しい！名誉称号「世の光」が授与されるように。このメシア称号の敬虔な者たち、終末論的な救いの共同体への転用は、しかしながら怪しむに足らない。「神の子」という称号は他でも決してメシアの特権ではない。まさに「メシア〔250/251〕的な」ソロモンの詩篇17篇においても、敬虔なイスラエル人たちについてこう言われている。 πάντες υἱοὶ θεοῦ εἰσιν αὐτῶν (30節)。

ソロモンの知恵2,13以下において神なき者たちが敬虔な者たちに帰す神の子である意識も、おそらくサムエル記下7,14、歴代誌上22,9-10、詩編89(88),27のような王(メシア)の言葉に由来しているであろう。そして黙示録21,7によれば、ヘブライ書1,5が神的なメシアに関連づけているソロモンへの約束は、すべての勝利者たちに成就するはずなのである<sup>28</sup>。メシア称号のすべての真に敬虔な者たちへの転用のもう一つの例を、人の子という術語の展開が提供している。それは元来、そして共観福音書の黙示において、メシア的な救いをもたらす者を指しているが、ダニエル書7章において与えられている解釈においては、いと高き者の聖なる者たちの民に関連づけられる(マタ9,6,8; マコ2,28も参照)。

そのような元来王的な特権の「民主化」がつまりここでも行われているのである。メシアについてこう予見されている。すなわち、平和の実現のために共に働くすべての敬虔な者たちが、その名誉称号を受け取ることになっているの

28 シュトラック-ビラーベック第I巻 219-220 ページのさらなる例証、プセット『ユダヤ人の宗教』[Bousset, W., Religion der Juden<sup>2</sup>] 161-162、項目「神の子」『聖書百科事典』[Artikel Son of God, in: Encyclopaedia Biblica] IV, Sp.4690ff.; B. W. ベーコン [Bacon, B.W., HTR 1919, 171-209] を見よ。〔訳注：正しくは、Bousset, W., Die Religion des Judentums im neutestamentlichen Zeitalter, 2.Aufl. Berlin 1906, S.211f.; Bacon, B.W., Jesus the Son of God, HTR 2 (1909) 277-309.〕

である。あるいはメシアの名誉称号が、メシアをその業、*εἰρηνοποιεῖν* の際に助けたすべての者たちにも分与される——もちろんこの要素はテキストには明言されていない。

#### IV

我々の言葉はつまりメシア的・終末論的な思想圏にも適合するのである。それ自体神の子と呼ばれるメシア的な王が熱望されている平和をもたらす者である。そこで「神の子」は名誉称号となることができた。それは、何らかの形で平和を促進するすべての敬虔な者たちに約束されていた。我々はしかしながら、この言葉の周りに設定した〔探求の〕枠を〔初期ユダヤ教黙示思想からヘレニズム周辺世界へと〕なお拡大することができる。これに関しては我々に、*εἰρηνοποιός* の語の語彙記述的な調査結果が一つの重要な示唆を与えてくれる。

すでにクレマー-ケーゲルがこの語に関する項目において、*εἰρηνοποιός τῆς οἰκουμένης* 「全地の平和を創る者」という言い回しがコンモドゥス帝の名誉称号として出て来る Dio Cassius 73,15,5\*、そして *εἰρηνοποιός* がユリウス・カエサルの名誉ある呼び名として使われている44,49,2を指摘している<sup>29</sup>。彼らはしかしながら、これらの箇所をそれ以上には用いておらず、私が見る限りでは、奇妙なことにまだ誰も〔251/252〕この語が皇帝称号において使用されていることが我々の至福の言葉にとって持っている意味に気付いていない<sup>30</sup>。

---

\* [訳注] 本論文著者のヴィンディッシュは 72,15,5 と書いているが、参照されているクレマー-ケーゲルの辞典では 72,18,15 となっている。章節数の違いは使用している校訂版の違いによると思われる。ここでは Foster, H.B., *Dio's Roman History*, LCL, vol.9, London 1927 に従って 73,15,5 としておく。

29 『新約ギリシア語辞典』[Cremer, H./Kögel, J., *Biblich-theologisches Wörterbuch der neutestamentlichen Gräcität*, 10.Aufl. Gotha 1915] 417 ページ。ヴェットシュタイン [Wettstein, J.J., *Novum Testamentum Graecum*, vol.1, Amsterdam 1751] はこれらの典拠を挙げていない。

30 これらの箇所に注目したことが目下の論文に取り掛かるきっかけを私に与えてくれた。元来私はこの至福の言葉を直接皇帝礼拝と結びつけようと欲していた。タールの指摘と旧約・ユダヤ教の類例をより詳しく考察することで、私はこの一面的な見方に陥らずにすんだ。第二コリント注解 [Windisch, H., *Der zweite Korintherbrief*, KEK 6, 9.Aufl. Göttingen 1924] 194 ページで私はすでに暗示的に、以下で詳しく述べる諸々の関連を指摘している。



第二に挙げられた箇所は暗殺されたカエサルのためのアントニウスの大演説の中に出てくる。それはその並行例を若干のキリスト論的逆説の中に持っている奇妙なアンチテーゼの中の一つである。ἄοπλος ὁ εὐπόλεμος, γυμνὸς ὁ εἰρηνοποιός, πρὸς τοῖς δικαστηρίοις ὁ δικαστής, πρὸς ταῖς ἀρχαῖς ὁ ἄρχων, κτλ. 「非武装で戦いに有能な者、丸腰で平和を創る者、法廷団に直面して裁判官、諸々の政府に直面して支配者、云々」<sup>31</sup>。εἰρηνοποιός はつまり、pacator orbis 「地球を平和にする者」にして神に等しい力と神的な由来を持つ世界支配者カエサルが担うに相応しい、名誉称号の一つなのである。よりの確に言えば、ὁ εἰρηνοποιός でもって、彼に神的な名誉が帰されたとしてつもない業績が表されている。ὁ ἥρωας, ὁ θεός, 「英雄〔半神〕、神」と彼はやはりこの段落の冒頭で呼ばれている。

もう一つの箇所 (73,15,5\*) はコンモドゥスとその元老院に宛てた手紙の中で自分自身を飾り立てて悦に入っている皇帝の名誉称号の見せびらかしのリストに属している。Αὐτοκράτωρ Καῖσαρ, Λούκιος Αἴλιος Αὐρήλιος Κόμοδος, Αὐγουστος, Εὐσεβής, Εὐτυχής, Σαρματικός, Γερμανικός Μέγιστος, Βρεττανικός, Εἰρηνοποιὸς τῆς οἰκουμένης, Ανίκητος, Ῥωμαῖος Ἡρακλῆς, Ἀρχιερεὺς. 「皇帝カエサル、ルーキウス・アエリウス・アウレリウス・コンモドゥス、アウグストゥス〔荘嚴なる者〕、敬虔なる者、幸運なる者、サルマティア征服者、ゲルマニア最高征服者、ブリタニア征服者、全地の平和を創る者、無敵の者、ローマのヘラクレス、大神官」。ここでも εἰρηνοποιός で、その勝利によって世界に平和をもたらし、それによって神ないし神的英雄であることを実証した世界支配者が表されている。εἰρηνοποιεῖν τὴν οἰκουμένην「全地を平和にすること」は神の顕現なのである！

31 さらに 44,49 冒頭を参照。ἀλλ' οὗτος ὁ πατήρ, οὗτος ὁ ἀρχιερεὺς, ὁ ἄσπλος, ὁ ἥρωας, ὁ θεός, τέθνηκεν 「しかしこの父、この大神官、略奪されることなき者、英雄〔半神〕、神、は死んでしまった」、さらにこの後の続きから ὑπὸ τῶν ἐταίρων (sc. ἀνηρέθη), ὁ πολλακίς αὐτοῦς ἐλείψας. 「同僚たちによって (命を取り去られた)、しばしば彼らに憐れみを施したにもかかわらず」。私はすでに第二コリント注解 252 ページ (2 コリ 8,9 の釈義) でこの箇所に注意を喚起している。

\* [訳注] 前ページの訳注を参照。

意表を突く光がここから一挙に我々の至福の言葉に注ぐ。μακάριοι οἱ εἰρηνοποιοί, ὅτι αὐτοὶ υἱοὶ θεοῦ κληθήσονται。「幸せだ、平和を創る者たちは、なぜならその者たちこそ神の子らと呼ばれるであろう。」ローマの皇帝たち、そして広くは、世界に、その地に平和を与え、それゆえその感謝しており、時にはまた隷属している家臣たちから神々そして神の子らに高められた、古代の支配者たちよりも、誰がこの至福の言葉に相応しいだろうか？<sup>32</sup>それは古代の支配者崇拜のための最も美しく決定的なモットーである。特に的確に表現されているのが ὅτι の文である。それは [252/253] そのままで支配者たちに授与されるであろう神格化に関連づけることができ、それからまたそのキリスト教的解釈においてたとえば敬虔な者たちの天使たち、神と交わっている天の住人たちの地位への昇格（マコ12,25並行）を意味したはずである（J.ヴァイス『新約の諸文書〔注解〕』〔Weiß, J., Die drei älteren Evangelien, SNT 1, 3.Aufl. Göttingen 1917〕該当箇所参照）。二つのギリシア語の言い回し（εἰρηνοποιότ と υἱοὶ θεοῦ）が有機的につながって関連していることはここで完全に確実となった。それはいずれも古代の皇帝および支配者崇拜の確固とした術語である。次のように反論してはならない。すなわち、カエサルに関する箇所はディオ・カッシウスに由来しているのだろう、この称号はそうだとすれば、つまり最も早くてコンモドゥスについて例証があるものである、と。〔そうではなく〕この語はすでにコンモドゥス以前に皇帝称号に導入されていた蓋然性が高い<sup>33</sup>。そして実際アレクサンドロスとその後継者たち以降平和を打ち立てることが、偉大な支配者が神的に

---

32 この脈絡における καλεῖσθαι の使い方については以下を参照。Plutarch, Apophth. Lac. p.219 Ε συγχοροῦμεν, ἔφη (Δάμις), Ἀλεξάνδρῳ, ἐὰν θέλῃ, θεὸς καλεῖσθαι。「我々は譲歩する、と彼（ダーミス）は言った、アレクサンドロスに、もし彼が欲するなら、神と呼ばれることを」。Curtius Rufus, Hist. Alex. VIII 5,5 Iovis filium non dici tantum se, sed etiam credi volebat。「彼はユピテルの子であると言われるだけでなく、そうであると信じられることを欲した。」

33 術語的な意味なしで εἰρηνοποιός はすでに Xenophon, Hellen. VI 3,4 に出てくる。祭儀的な意味で Plutarch, Actia Romana 62 p.279 B では Fetiales 「条約締結祭司」の訳に用いられている。τῶν λεγομένων Φιτιαλέων, Ἑλληνιστὶ δ' οἶον εἰρηνοποιῶν σπονδοφόρων。「Fetiales と呼ばれている者たち、ギリシア語ではほぼ εἰρηνοποιόι, 停戦協定使節」。さらに Pollux Onomast. [I] 152 を参照。[Περὶ] συμμάχων εἰρηνοποιῶν καὶ πολεμοποιῶν。「共に戦う者、平和を創る者そして戦いを創る者〔について〕」。

崇拜されるための主要な業績、また最も重要なきっかけとなっているのである。

誰もアレクサンドロス以上に Εἰρηνοποιὸς τῆς οἰκουμένης という称号を担うのに相応しい者はいないであろう。プルタルコスがその小冊子「アレクサンドロス大王の幸運あるいは徳について」Ic.6および9 (p.329 C, 330 E) で彼について以下のように言うとき、それは Εἰρηνοποιὸς τοῦ κόσμου と言う称号の解釈以外の何物でもない。κοινὸς ἦκειν θεόθεν ἄρμοστής καὶ διαλλακτῆς τῶν ὄλων νομίζων κτλ. そして οὐκοῦν πρότη μὲν ἢ τῆς στρατείας ὑπόθεσις φιλόσοφον τὸν ἄνδρα συνίστησιν, οὐχ ἑαυτῷ τρυφὴν καὶ πολυτέλειαν ἀλλὰ πᾶσιν ἀνθρώποις ὁμόνοιαν καὶ εἰρήνην καὶ κοινωνίαν πρὸς ἀλλήλους παρασκευάσαι διανοηθέντα。「彼は神に由来する運命を分け持ち、すべての者たちの支配者かつ仲裁者であると考えたので云々」そして「したがってまず第一にその遠征の構想はその男を哲学者として、自分自身のために肥え太ることと贅沢をではなく、すべての人間たちのために同じ心になることと平和とお互いの共通の事柄を準備することを目指す者と推薦していた。」<sup>34</sup> そしてデメトリオス・ポリオルケテスを讃える有名な讃歌（アテナイオス VI 62 p.253 d e）において神の子が呼びかけられているとすれば（ὁ τοῦ κρατίστου παῖ Ποσειδῶνος θεοῦ 「おお、最も強力なる神ポセイドンの子よ」という呼びかけを参照）、πρῶτον μὲν εἰρήνην ποιήσον, φίλτατε κύριος γὰρ εἶσύ 「まず第一に平和を創り給え、最も愛しいお方よ。なぜならあなたは主であられるから」、ここでも支配者である神はまず第一に εἰρηνοποιός として登場しなければならないということが示されている。より厳密にとれば、ここで神の子はその尊厳を εἰρηνοποιεῖν によって実証しなければならないのである。彼〔デメトリオス〕はその称号を、すでに彼がその神的な業を成し遂げる以前に担っている。この讃歌は、いわば三位一体論的に、この至福の言葉を養子論的に考えている<sup>35</sup>。

神的な国王 [253/254] 夫妻、プトレマイオス三世とベレニケに新たな祭儀

34 両方の箇所はまた原始キリスト教のキリスト崇拜への重要な類例でもある。2コリ 5,18 以下、ロマ 15,3 等々と私の第二コリント注解 194 ページ参照。

35 他のところでも支配者たちはすでに神的に生まれたものと見做されている。とはいえ、死後の神格化が彼らの神적崇拜の通常の様式であり続ける。

的名譽を帰すカノーブスの勅令においても、彼らとその国のためになしとげ、またそのために祭司たちが彼らに向けられる神的な崇拜を確証し、増やそうとしている功績の中に、平和を保障することが挙げられている<sup>36</sup>。

アレクサンドロスとカエサルと並んで、次に特に<sup>1</sup>Αὐγούστου<sup>2</sup>ςが Εἰρηνοποιὸς τοῦ κόσμου の称号で飾られていてもよいところである。そのような者として彼はいずれにせよ、対応する称号が明言されていないとしても、ハリカルナッソスの名誉碑文<sup>37</sup>において褒め称えられている。ここではアウグストゥスによって全世界にもたらされた平和の状態の描写が (εἰρηνεύουσι μὲν γὰρ γῆ καὶ θάλαττα κτλ. 「地と海は平和である云々」という導入部を参照)、彼に添えられる宗教上の称号の正当化に役立てられている。πατέρα μὲν τῆς ἑαυτοῦ πατρίδος, θεᾶς Ῥώμης, Δία δὲ πατρῶν καὶ σωτήρα τοῦ κοινοῦ τῶν ἀνθρώπων γένους. 「自分自身の祖国、神的ローマの父、父権を守るゼウスにして人間たちの共通の種族の救い主」。アウグストゥスが受けたすべての小アジアでの跪拜の上にも、我々の至福の言葉をモットーとして置くことができる<sup>38</sup>。

これらの皇帝碑文への素晴らしい補遺を提供するのが特に、<sup>1</sup>Φιλιππῶν<sup>2</sup>がその書『ガイウスへの使節』143/151 (p.567f. M.) で二人の最初の皇帝かつガイウスの前任者たちに捧げている讃歌的な段落である<sup>39</sup>。ここに我々はあちらには無かった定式をも見出す。二人の支配者たちはすなわち特に平和をもたらす者そして平和を保つ者として褒め称えられている (§ 141.144-147)。<sup>1</sup>Αὐγούστου<sup>2</sup>ςについては特にこう書かれている。ὄν ἄξιον καλεῖν ἀλεξίκακον 「災いを退ける者と呼ぶに相応しい」(144)、そしてさらに彼は朗々と鳴り響く称号が羅列される中で ὁ εἰρηνοφύλαξ 「平和を守る者」という修飾語を受け取る

36 Dittenberger, Or. Graec. Inscr., Leipzig 1903-05, 56, Z.16ff., 20ff.を見よ。

37 Inscr. Brit. Mus. 894; Wendland, Die hellenist.-röm. Kultur, Tübingen<sup>2</sup>1912, S.102 に引用。

38 アウグストゥスのための υἱὸς θεοῦ という称号は特に CIG Graec. sept. I 63 に見られる。Αὐτοκράτορα Καίσαρα θεοῦ υἱὸν ἀρετᾶς ἕνεκεν καὶ εὐεργεσίας. 「独裁者カエサル、徳と慈善のゆえに神の子」。さらに Wetter, G., »Der Sohn Gottes«, FRLANT 9, Göttingen 1916 S.18f.を参照。

39 オリエント趣味の祈りの文体における頌徳的な連祷と、それを W. Weber は的確に呼んでいる (Der Prophet und sein Gott = Beih. 3 zum Alten Orient, Leipzig 1925, S.155)。

(147)。双方の修飾語 (ἀλεξίκακος「災いを退ける者」と εἰρηνοφύλαξ「平和を守る者」) は我々の εἰρηνοποιός の同義語である。πρῶτος καὶ μέγιστος καὶ κοινὸς εὐεργέτης「第一人者かつ最大の者かつ普き慈善家」(149) という定式でフィロンはもう一度亡くなった皇帝の高く、超人的な業績をまとめている。これより高くは、一人のユダヤ人として、彼は皇帝の賛美において手を伸ばすことはできない。満足しながら彼は、アウグストゥスは決して神という称号を許しはしなかったということを確認しており (τὸ μηδέποτε θεὸν ἑαυτὸν ἐθελήσασαι προσειπεῖν κτλ. 154)、この段落全体は第三代皇帝 [ガイウス・カリグラ] の傲岸不遜に反対しているのである。彼は [アウグストゥスと] 比較できるようなことすら成し遂げること [254/255] なしに、自分が神であると言ってそう信じ (162)、そして θεοῦ κληῖσις (=θεὸς καλεῖσθαι) 神と呼ばれる権利を主張している (163)。実際の εἰρηνοποιός に対してもフィロンは υἱὸς θεοῦ καλεῖσθαι「神の子と呼ばれること」をたしかに許しはしなかったであろう。とはいえ彼はアウグストゥスを高く評価することにおいて、全地が彼に神に等しい名誉を認めただけからには、この人におそらく正しく新たに選り抜きの名誉を授与してもよいだろう、と認めるどころまで踏み込んでいる (ὅτι καὶ πᾶσα ἡ οἰκουμένη τὰς ἰσολυμπίους αὐτῷ τιμὰς ἐψηφίσαντο「というのは全地がオリュポスの神々と等しい諸々の名誉を彼に投票で決めたからである」149)。その際フィロンはアウグストゥスの名誉のために建立された神殿<sup>40</sup>とその他の建物を指摘している。ここでつまり彼もまた、特に世界を屈服させる Ἀλεξίκακος「災いを退ける者」と Εἰρηνοφύλαξ「平和を守る者」に示された、莊嚴なる者 [アウグストゥス] の神格化と祭儀の崇拜を暗示しており、またもや εἰρηνοποιός と υἱὸς θεοῦ の間に存在していて、彼の時代に、すなわちイエスと福音書記者たちの時代にあらゆる人が感じたはずの、内的な関連に光を当ててそれを我々に見えるようにしてくれる。

最後になお、ウェルギリウスが『アエネーイス』の第1巻に置いている、神々の口からのアウグストゥスの讃美を指摘しておこう。ユピテルはユリウス氏族

40 そのような神殿がサマリアのセバステにヘロデによって建立されていた。フィロンはそれを意識していたであろう。

の母祖、ウェヌスに、他ならぬ彼女がその氏族の神的な子孫を天で受胎するであろうと確約する。その天で彼は、東方の略奪物を満載して現れるであろう。彼もまたそうして神と呼ばれ、彼の時代に戦いの門は閉ざされるであろう(286行以下)。ここでも明らかに *pacificator orbis* 「全地を平和にする者」の神格化が表現されている。ウェルギリウスがこの事後予言〔*vaticinium ex eventu*〕を書いた時、アウグストゥスはすでに彼の権力の頂点に立っていた。アクティウムの勝利は勝ち獲られ〔前31年〕、エジプトは征服されていた。ウェルギリウスは、帝国の平和の確保で終わった彼の英雄の勝利の道全体の恭しい証人であった。すでにその道の初めにおいて彼は、アウグストゥスが混乱した状況の中で力強く権力を奪取することがもたらす祝福に満ちた効果を個人的に感じ取ることを許された\*。アウグストゥスは彼をその所有地が没収されることから守ったのである。それに対して幸福な詩人は彼の神格化を予期して感謝し、『詩選』第1歌で宣言した(6-7行)。

deus nobis haec otia fecit.

namque erit ille mihi semper deus.

「神は我々にこの平穩を作られた。

というのは彼が私にとって常に神となるであろうから。」

アウグストゥスが彼のためにその所有地を保持し、彼にそのことを通して〔255/256〕詩の靈感〔*Muse*〕を再び授けくれたので、アウグストゥスは今や彼の神なのである。*εἰρηνοποιός* は感謝しているお気に入り〔の詩人〕によって神に高められる<sup>41</sup>。

この同時代の様々な告知に鑑みると、ギリシア語版の至福の言葉にまさに皇

---

\*〔訳注〕*Aeneis* 『アエネーイス』の執筆年代は前26-19年頃、*Ecloga* 『詩選』(牧歌)は39-38年頃、第二回三頭政治体制下の肅清と所有地没収は前43年である。Fowler, D., & Fowler, P. (2015, July 30). Virgil, 70-19 BCE. *Oxford Classical Dictionary*. Retrieved 11 Jan. 2020, from <https://oxfordre.com/classics/view/10.1093/acrefore/9780199381135.001.0001/acrefore-9780199381135-e-6829> を参照。

41 ここについては W. Weber, *Der Prophet und sein Gott*, S.37f. 144ff. を参照。

帝崇拜への意識的な関連付けを与える誘惑に駆られるかもしれない。〔その場合〕それは共観伝承における支配者崇拜への唯一の暗示ではないということになるだろう。それはその並行例をルカ福音書22,25に持っていることになる。οἱ βασιλεῖς τῶν ἐθνῶν κυριεύουσιν αὐτῶν καὶ οἱ ἐξουσιάζοντες αὐτῶν » εὐεργέται « καλοῦνται. 「異邦人たちの王たちは彼（女）らを〔主人として〕支配しており、そして彼（女）らに権力を振っている者たちは『慈善を施す者たち』と呼ばれている。」ここで「εὐεργέται」の代わりに「εἰρηνοποιοί」、いやそれどころか «οἱ θεοῦ» が置かれていてもよいところであろう。もちろん口調は双方の箇所ですべて異なる。ルカ22章では強度の皮肉であり、εἰρηνοποιός ではなく、征服者かつ専制君主として支配者たちは『慈善を施す者たち』と呼ばれる。マタイ（5,9）ではこれに対して賞賛である。その人たちは平和を打ち立てる者たち、救いをもたらす者たちであり、それゆえ神の子らの称号を得るに相応しい。

世俗的な支配者の至福の言葉かつその神的な名誉称号の承認というのは福音書においてももちろんいささか奇異に感じられる。古代の支配者崇拜に対する福音書の通常の姿勢はまさにルカ22章に、さらに2テモテ2,3以下に表されている。一連の至福の言葉において ἐλεήμονες の言葉だけが支配者たちへの関連の余地を残している（Dio Cassius 44,49: ὁ πολλὰκις αὐτοὺς ἐλέησας [カエサルについて]「幾度も〔同僚であり彼を暗殺することとなる〕彼らを憐れんだ者」を参照）。他のすべての名称は、支配者たちには完全に立ち入ることのできない領域に属している。後者はむしろ、そこで幸せだと称えられている者たちの敵、その者たちを迫害する者、万物の大転換の際〔終末〕に γῆ [地] に対する支配を πραεῖς [柔和な者たち] と ταπεινοί [低くされている者たち] に譲り渡さなければならない高慢な者たちである（さらにルカ1,51以下参照）。彼らはルカにおいて呪われている「金持ち」に属している。

至福の言葉とそもそも福音の精神にはむしろ、〔仮に〕支配者崇拜への「関連」が論争的に考えられていたかもしれないとするなら、より相応しいことになるだろう。すなわち、幸せだ、真正の εἰρηνοποιός は、なぜならその人たちがこそ神の子らと呼ばれるだろう。支配者崇拜はその場合、真の、イスラエルとイエ

スの弟子のサークルにおいてのみ実現している神〔との〕関係の<sup>カリカチュア</sup>戯画として提示されていることとなるだろう。しかしそのような論争的で辛辣な皮肉が横たわってはいない。奇妙なことはまさに、我々の至福の言葉は、文脈から切り離すならば、見事に支配者たちに当てはまるといふこと、そして逆に支配者崇拜の文脈に置くならば、驚くべき解釈が可能となるということである。すなわち、この至福の言葉の意味は、[256/257] 要するに、εἰρηνοποιοὶの神格化、目前に迫った平和を打ち立てる者たちが神の子らと宣言されることである！

皇帝からイエスの弟子たちへの飛躍はもちろんとてつもなく大きい。純粹な並行例はここでもキリスト自身である<sup>42</sup>。支配者称号と支配者たちに向けられた考察のかなりの部分は、必要な変更を加えればキリストに転用することができる。すなわち、キリストもまた、彼が主であるので、平和を与えてくれる。キリストもまた、アレクサンドロスのように、神から世界に秩序を与え、和解させる者として到来した。キリストは、古代の支配者たちのように、災いを退ける者、平和をもたらす者かつ神の子である。皇帝崇拜から見ても、弟子たちについての言葉は元来類似したメシアについての言葉を前提している（上述13-14ページ参照）。我々の言葉においてまさに、元来一人に相応しい業と称号が、一人の主<sup>に</sup>奉仕してないその代わりにメシアの業を遂行し、それゆえメシア的な名誉〔称号〕を受け取る、多くの者たちに約束されているのである。ヨハネの黙示録の回状における「勝利者の言葉」を参照。とりわけ黙2,26-28；3,21そして——最後ではあるが——21,7、そこでは勝利者に新しい神の都を受け継ぐことだけでなく、神の子となることが約束される。

いずれにせよ、〔我々の至福の言葉の〕ギリシア語版の用語法は古代の支配者の称号の付け方に影響されている可能性を考えるべきである。εἰρηνοποιόςの語は支配者崇拜の用語法から取られている可能性がある。——我々の福音書の言葉はその場合、その最古の証言ということになるであろう——そして υἱοὶ θεοῦ (κληθήσονται) もまた皇帝崇拜に由来する可能性があり、何か他の種類の約束の代わりに入れられたのかもしれない。この思考はそうだとすると、ヘレ

---

42 この点についてはローマイヤー『キリスト崇拜と皇帝崇拜』[E. Lohmeyer, Christuskult und Kaiserkult] 1919年を参照。



ニズムのなものからキリスト教的なものへ転用され、同時に — 原始キリスト教共同体の社会的な性格に対応して — 宮廷の環境からキリスト者共同体の小市民的な領域に移されたのだということになるであろう。

## V

そこから出発して平和を打ち立てることと神の子の間の関連を説明することができる二種類の思想圏、ユダヤ教の王とメシアの表象、そしてヘレニズムの支配者崇拜を、我々はこうして見出したのである。歴史的に見るならば、マタイ福音書5,9はもちろん前者と、より密接に結び付いている。しかし稀なギリシア語 εἰρηνοποιός はそれをまた混淆宗教的な構造物とも結びつける。最後に、[257/258] 我々はユダヤ教のメシア主義とヘレニズムの支配者崇拜を、二つの切り離された文化圏がそこまで独立して生み出したものとして考察すべきではまったくない。それらはむしろ非常に似通った構造のもので、東方でまず固定化された同じ支配者の理想像の二つの異なる変化形なのである<sup>43</sup>。そこで、ユダヤ教においてもヘレニズムにおいても、平和の基礎を築く者として、そして同時に神の子として褒め称えられた人物像が形成されたということが説明できる。我々の言葉はその二つの概念の結合からしてすでにユダヤ教のメシア主義に遡源させることができる。しかし可能であるのは、ギリシア語で表現する際に、ヘレニズム的・ローマの支配者崇拜の用語法が影響を与えたということである。

我々は、第七至福はその用語法に従えば一つの壮大な思想複合体に由来している、という証拠を提供した。それと対照的なのが、そのマタイの山上の説教における具体的な脈絡である。世界史的、普遍的なものからそれはここでは

---

43 R. キッテル『ヘレニズムの密儀宗教と旧約聖書』〔Kittel, R., *Die hellenistische Mysterienreligion und das AT*, BWAT 32 NF 7〕1924年参照。特に密接なのが非ユダヤ的支配者称号の歴上 22,9-10 への関連である。バビロニアの諸テクストはアイヒロート上掲書〔注21〕141 ページ以下を見よ。

小さな、小市民的なもの、日常的なものに引きずり降ろされているように思われる。ここで意味されている εἰρηνοποιεῖν は、服従しない者たちを征服して国と世界の平和の基礎を築くことを目標とする、影響の甚大な公けの行動に関連するのではなく、個人的な付き合いの範囲での和解の行動に関連している。それに対応して、イスラエルで元来は王とメシアの特権であり、ヘレニズムにおいては支配者たちだけに、彼らを他の人間たちの上に格付けるための名称として認められた、「神の子」という称号が、ここでは大衆化されて、一つの（小さな）宗教的共同体の同志たちに授与されている。一人ではなくこの者たち全員が神の子らと呼ばれるであろう、そしてそのことが一人のお方の仲介によって起こるであろうとは言われていない。

にもかかわらず、元来の背景は断じて消え去ってはいない。εἰρηνοποιεῖν という際、我々の言葉において、そうなったならば βασιλεία τοῦ θεοῦ 「神の国」において支配的で永続的なものとなるはずの、かの理想的な状態を広げることにも考えられている可能性がある。バプテスマのヨハネ、第二のエリヤが、ルカ 1,17によれば大いなる εἰρηνοποιός と表され得るように、ここでは、その〔状態の〕意味で分裂した氏族や世代、争っている民の同胞たちを和解にもたらし、〔258/259〕抑圧されている者たちを助けてその権利を守る者たちすべてが意味され得るのである<sup>44</sup>。εἰρηνοποιεῖν は神の国を準備する働きと考えられ、εἰρηνοποιοί は悔い改めの預言者〔ヨハネ〕そしてメシア的預言者自身〔イエス〕の助け手と思い描くことができる。そしてその場合、一つの共同体全体、民全体に神の子らの称号が約束されるとすれば、ここでも壮大な展望が開ける。すなわち、我々は一つの γένος ἐκλεκτόν 「選ばれた種族」、βασιλείον ἱεράτευμα 「王の〔家系の〕祭司団」、ἔθνος ἅγιον 「聖なる民族」、λαὸς εἰς περιποίησιν 「〔神の〕所有となるべき民」、λαὸς θεοῦ 「神の民」（1ペト2,9-10〔岩波版小林稔訳〕）、メシアの時代に地を満たすであろう民、油注がれた者たち、キリストたち、神の恵みの支配者たちの民を見る（さらに黙1,6；21,7を参照）。

冒頭で立てられた第七至福における称号と約束の間の内的関係の問いは、こ

---

44 箴言 10,10: ὁ [...] ἐλέγχων μετὰ παρηρησίας εἰρηνοποιεῖ 「齒に衣着せず叱責する者は平和を創る」；ゼカ 8,16 参照。

こをもって解決へともたらされた。我々は間接的な関係を発見した。すなわち、神が—ユダヤ教文献と特にユダヤ教の典礼において—世界において平和を打ち立てる者であり、そこでその業をいわば真似る人間たちはその子らと呼ばれてしかるべきなのである。媒介的な概念としてつまりその場合、神を真似ることあるいは神と似ていることという考えを解釈の中にはめ込まなければならない。平和の働きと神の子であることとの間の直接的な関係は、それに対して、まずユダヤ教の終末論とメシア論が提供する。第一には、メシアの時代に救いと平和をもたらすお方に特別な称号が授与されるであろう、というその教えでもって、それから次に、平和を打ち立てることが神の子、油注がれた者、メシア的な王あるいは最後に神の子一人一人の特徴的な業であるという考えでもって。すなわち、油注がれた者は神の子であるゆえに平和をもたらす。あるいは、彼は平和を打ち立てるがゆえに神の子という名誉称号を受け取る。そしてそのギリシア語の形においてこの言葉はまさに、神的・王的な平和をもたらす者の理念のヘレニズム・ローマ的なヴァージョンの表現である。そこで用語とそれらの結び付きは一つの非常に高尚な思想圏に由来するのだが、この表象は我々の言葉において元来のメシア的・専制君主的な環境から、ユダヤ的・原始キリスト教信仰の市民的・プロレタリアートの的な性格にまったく対応して、小市民的・民主的なものの中へと引きずり降ろされている。新約聖書はただ単に万民祭司〔*allgemeines Priestertum*〕を告知するだけでなく、万民が王であること〔*allgemeines Königtum*〕、小さい者たちが平和を打ち立てる者たち、そして世界の共同支配者たちの地位へ引き上げられることをも告知している。この多くの者たちの神格化の前〔259/260〕提は、一人の民族解放者、世界征服者、世界の覇者そして世界を幸せにする者の壮大な、恐ろしくも素晴らしい行いにおいて実現するのではなく、その領域はまずは庶民の小さな世界、家族、共同体、村、町、そして民族共同体である<sup>45</sup>。そこで我々の至福の言葉において、

---

45 K. ケーラーはその至福の言葉の鋭い分析（「至福の言葉の元来の様式」『神学研究批評』〔K. Köhler, *Die ursprüngliche Form der Seligpreisungen*, ThStKr 91 (1918), 157-192〕1918年、198-199ページ）において特に、使徒たちが平和の挨拶を携えて回ったこと（マタ 10,12-13）を考えている。それはしかしもっと広く捉えるべきである。

日常生活の苦悩と争いが我々に課す諸々の義務は、考え得る限り最高の高貴な位を受け取るのである。もっとも小さなサークルにおける祝福をもたらす行いが、全世界を幸せにするアレクサンドロスやアウグストゥスの業績に等しいものとされるのである<sup>46</sup>。

[1925年6月30日脱稿]

[訳者付記：本訳稿をご退職される片山寛教授に謹んで献呈する。校正作業の途中2022年2月24日、ロシア軍がウクライナに侵攻する事態となった。ウクライナでもミャンマーでも独裁者が「平和を作る」と偽って戦争を行なっている。それに対してロシアでもミャンマーでも、そして世界中で武力によらない真の平和を求める市民の声が上がっている。平和を作るのはプーチンでも、ミン・アウン・フラインでもない。バイデンでもなく、軍事同盟である NATO でもない。真の平和を作るのは、それを求める市民の声であり、行動である。訳者はここに希望を見出す。「幸せだ、平和を創る者たちは、なぜならその者たちこそ神の子らと呼ばれるであろう。」]

---

46 第Ⅱ段落(平和を打ち立てる者としての神)にはなお、フィロンからいくつかの典拠を比較すべきである。『十戒』178 p.209 Μτῶ γὰρ ὄντι ὁ μὲν θεὸς πρὸ τῆς εἰρήνης 「というのは真に神は平和の指導者である」；『相続人』206 p.502 ἐγὼ γὰρ ἐπικηρυκέομαι τὰ εἰρηναῖα γενέσει παρὰ τοῦ καθαρῆν πολέμους ἐγνωκότος εἰρηνοφύλακος αἰεὶ θεοῦ 「というのはこの私は平和なことどもを被造物に、戦いを滅ぼすやり方を知り尽くしており、常に平和を守る者である神から、告知らせるのである。」；『夢』Ⅱ 253 p.692 θεὸς μόνος ἡ ἀνευδεστάτη καὶ πρὸς ἀλήθειάν ἐστιν εἰρήνη . 「神お独りがもっとも嘘をつかず、かつ真理に向っている平和である。」いかにフィロンが εἰρηνοφύλαξ という称号を神にも皇帝アウグストゥスにも認めているかに注意せよ(上述[原著254f.]参照)。アウグストゥスはつまり、神のように平和を促進する者であったがゆえに「神に等しい名誉」に相応しいのである。同じことを我々の至福の言葉が語っている。